

岡本かの子『落城後の女』における「饅頭屋本の節用集」

Manjuya version of Setsuyoshu (節用集: Japanese-Kanji Lexicon) in Okamoto Kaonoko's "Woman Leaving the Lost Castle" (岡本かの子『落城後の女』)

佐藤貴裕

SATO Takahiro

【キーワード Keyword】 辞書史 近代語 近代文学 昭和戦前期 林宗一 役割語

【所属 Institution】 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

【要旨 Abstract】 『落城後の女』の「饅頭屋本の節用集」は、主人公・おあんにとっては父親との思い出の品であり、生形見であり、饅頭屋・

林宗五に惹かれていく契機となるものである。文学的修辭をまとっているため、原本との乖離も認められる。その差分のありようを種々検討することを通じて、昭和戦前期における節用集観を垣間見た。

はじめに

これまで、節用集の終焉のありようを観察し（佐藤 二〇二一・二〇二二a-c）、次代の辞書群にいかに関係が継がれるかを模索してきたが（佐藤 二〇二二d）、本稿もこの一環を構成するものとして、小説に現れる節用集に注目するものである。

同時代の証言としての意味合いで中野重治『梨花』のような自伝的小説を扱ったが（佐藤 二〇二二a）、上司小剣『紫谷村』のような、節用集が一冊も登場しない作品にも注意した（佐藤 二〇二二）。これは、「節用集」と綿名される主要人物がほぼ作品全体を通じて登場することから、綿名に込められた小説的寓意に接近することで、大正期における節用集観を垣間見られるとの目算があったからである。

ある時代に書かれた小説は、その時代の読者との共通理解を育みつつ書き進められるだろう。読者に作意を伝えるためには、素材となる事物の象徴的ありようをとり

だして小説中に描きだすこともあるだろう。そうした表現に注目することで、時代時

代における、いわば最大公約数的な節用集観に接しうると考えるのである。このような目論見のもと、本稿は、岡本かの子『落城後の女』に現われる「饅頭屋本の節用集」と、これをめぐる表現について検討を加え、昭和戦前期における節用集観を垣間見ようとするものである。

一 関係本文

『落城後の女』のなかで、節用集の現れる部分を引用しておく。論述の都合からA-Dの記号を与えた。テキストは『巴里祭』（青木書店、一九三八）による。

まず、生形見として父親より与えられた部分を引くが、それに先立つ、父親の立場も知られる部分を合わせ引いたため、やや長い中略箇所を含むこととなった。注目箇所には傍線を施した。

A おあんの父親は山田玄暦といった。石田三成に仕へ、一家四人は関ヶ原の戦のときは、美濃の大垣城へ駐在したまゝ立籠つて、東軍に囲まれた。一人の兄は戦死した。

落城の前の日、父親の持ち場の陣屋へ矢ぶみが来た。玄暦はそつとそれを持ち帰つて思案に暮れてゐた。玄暦は、家康公の手習師匠をしたこともあるものゆゑ、城を逃れ度くば助けらるべし、攻め勢の諸手へは通牒してあるから、路次の触りはないといふ、敵の本陣からの通告であつた。(中略)

淀どのは、おあんが石田治部の家来の娘だといふので信用し、また、美しい若衆顔が気に入つた。少年のやうにおあんの前髪を大きく振り分けさせ、ときには袖無し羽織に狭い縞帯といふ男姿にも仕立て、自分と秀頼との間で召使つた。

玄暦は娘の落付きを見て安心し、これで思ひ残すこともない。自分は武士の進退を誤つた人間だ。草の中へ隠れて朽ち果れる。これを親子一世の別れと思へ。

さう云つて老妻を連れて、土佐の身寄りを頼つて下つて行つた。形見に饅頭屋本の節用集を呉れた。横綴ぢの二冊の写本で、きたないが何の事でも書いてあつて便利な本だつた。(一六〇〜一六三ページ)

ついで落城まぢかの大坂城から逃れる場面である。「生形見」の節用集を忘れるはずもない。

B

「やあ、片桐東市正の手の者が敵軍を案内して来て、千畳敷へ石火矢を仕かけてゐるぞ」と怒鳴る声が聞えた。二人は顔をそむけるとたんに周囲が破れ裂け、家形が火煙の中に碎け散る音で囲まれた。おあんはそれから夢中だつた。

おあんはお玉がどうしたかも忘れて局へ帰り挟箱から帷子をとり出し三枚重ねて着た。下帯も三つして、それから父親の形身の節用集と秀頼公から拝領の鏡を懐へ入れて小長刀を執つて大台所へ出た。何も彼も夢中でやつてゐて、しかし、何処からか自分のやることを自分で冷やかに眺めてゐるやうだ。(二〇三ページ)

この後、おあんは、行きあつた三歳下の小菊をたよりに奈良市街に潜伏したが、そ

の家からは饅頭屋が望めた。ここでの節用集にまつわる記述は、もつとも内容が充実する。論述の都合からCとDに分割して引いておく。まずは、父親との手習いの思い出を含む部分だが、注目箇所も長きにわたるので傍線は施さない。

C

おあんは、「宗五さんて、誰よ」と訊くと、
「饅頭屋の息子さんで、わたしの幼馴染なの。でも小さいとき京都へ勉強にやられて訣れたきり、今度逢へば七八年目にもなるのだから、どんな変り方をしてゐるか、早く見たいものだ。」と頻りに窓から目を配つた。

おあんは、或る日久し振りに、父親が生形見に呉れた節用集を取り出して見た。表紙もぼろ／＼になつてゐる横綴の二冊の古本だが、おあんが少女時代に大阪浪々中の行灯の灯かげで、父と娘が親しみ合つた手習ひの夜が思ひ出された。娘は手習ひの筆を控へて、物ごころがつきかけの旺盛な智識欲を、用捨なく父に投げかけた。父は自分で力及ばなくなると「待て／＼」と云つて、この本を繰り上げた。おあんが驚いたことは、おあんがおよそ訊ねることは何でもこの本に書いてあつて、父はそれを見て答へて呉れた。何といふ怖ろしい物憎い本であらう。

かういふものを一体誰が造つたのだらう。おあんは父親に訊いてみた。すると父親は饅頭屋宗二が作つたもので、先祖は支那の林和靖だが宗二の四五代前に支那から移住して来て、饅頭屋を開き、宗二の子孫は今なほ奈良に在る。代々学者の出る饅頭屋だといった。「どうして饅頭屋からそんなに学者が出るのか」と訊いたら「血統なのだ」と父親はあつさり答へた。(二一九〜二二〇ページ)

これに直結する部分では、生形見の節用集を使用したおりの思いが豊かに記される一方、それをそのまま転用して、編者とした林宗二への魅惑的な印象の表現とする。

D

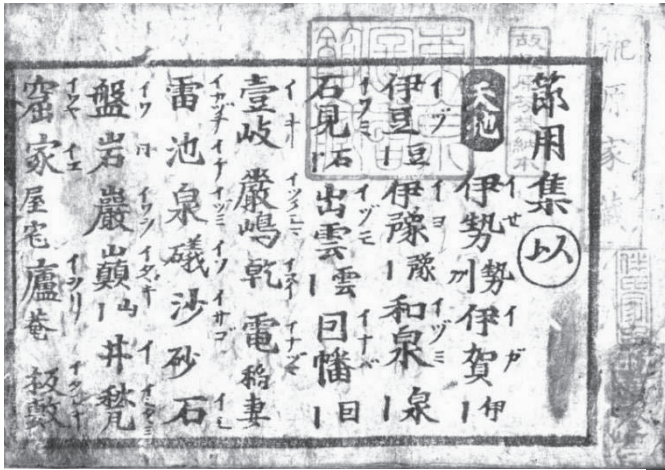
おあんはこの本を天地の間の智識が咲き乱れてゐる花園か、噴きこぼれる泉のやうに瑞瑞しく尽くることなく、しかも、それが取出されて供給される場合に、まるで空の虹を望むやうに、地上のわれを忘れ果て、限らない空想の上に自分を乗せて呉れる不思議な本だと、小娘の心にどんなにか、尊敬に伴ふ秘密を帯びた

感じを抱いてみたであらう。その節用集の著者饅頭屋宗二の名前も、あらゆる智慧の持主といふ文珠菩薩と人の心を自在に誑かす天魔外道とを一緒にしたやうな神秘的な名前として、かねておあんに受取られてゐた。そして代々さういふ神秘的な人間が生れる饅頭屋は、余程造化から仕組まれた家筋に思へた。自然その子孫の一人が現に奈良のこの町の筋向うに住んでゐて、しかも、若者であることはおあんにしたゞならぬ消息であつた。

おあんは何にも云はなかつたが、小菊と並んで二階の窓から、期待の眼を饅頭屋へ向け勝ちになつた。(二二〇～二二二ページ)

CD部分の描写は、実に魅力的である。その魅力の一つは、節用集史を記述・研究する立場から感じるもので、節用集との関係がこれほど豊潤に語られる例が他にないだろうからである。実感的に、それもおあんの内面にわたる表現として、なかば夢想的なまでに語られるのは見事である。もちろん、Dの最後の一文に集約されるように、のちにただ一度の交歓におよぶ宗五に関心を寄せるにいたる経緯を、読者に納得させるための作為ではあろうけれども。

としても、このくだりに接した読者のなかには、辞書・事典にまつわる、似たような経験を持つ人も少なくないであらうし、そうした記憶を呼び覚まされた人もあつたことであらう。私事にわたるが、小学生のおり、『学習国語新辞典』(小学館)や『原色学習図解百科』



饅頭屋本「節用集」国立国会図書館蔵

(学研)を買い与えられたおりの経験を想起させられた。自分専用の辞書・事典を得て、そのあちこちを散読する楽しさ、語釈に出てくる語や関連事項を引き巡ることの面白かったことを鮮明に想起し、また、類似した事態を他にも経験したという記憶のあることを確認したことである。

ただ、現実の饅頭屋本節用集が、こうした表現に見合う体験を与えるものとは思えない。それを次節で確認していく。

二 「饅頭屋本の節用集」

〔現在の学術的規定〕

饅頭屋本と称される節用集は現存する。「横綴ぢの二冊の写本」(A)とあるように、確かに横本(横長本)なのだが、写本ではなく版本であることが大きく異なる。上田・橋本(一九一六)より摘記してみる。

第七類 饅頭屋本

此の本は、巻数一卷、「あ」「お」「ゑ」の三部は「い」「を」「え」に併せ、門は天地時節以下十一門であつて、中に、生類雑用の二門あるを特徴とする。

二一 饅頭屋本 刊本一冊 東京帝国大学附属図書館蔵
丈四寸五分五厘、幅六寸四分五厘、美濃紙半截の横綴本であつて、本文は一面八行、四周に太い単線の欄界があつて(其の高三寸七分五厘、幅五寸七分五厘)、柱に丁付がある。全部九十八丁、巻頭には「節用集」と題し、九十丁裏以下には付録がある。付録は左の二種である。

京師九陌名

俗名用(即、名乗集。吉より篁まで。排列の順序は、大略、同訓字の多いものを先にし、次第に少ないものに及んで居る)

全部楷書片仮名、仮名は「ユ」を「*」としたのを始め、古体のものがある。各部の名は、万葉仮名を圈を以て囲んだものであらはし、其の直下から本文を続け書いてある(中略)。門は

天地 時節 草木 人倫 人名 官名 支体 生類 財宝 食物 雑用
の十一に分れ、門名は白字で標してある(中略)所収の語も少く、註は極めて稀
で、又、甚簡単である。(七四〇七六ページ)。*は初筆のごく短いZ字様)

ここで注意されるのは、最後の「所収の語も少く、註は極めて稀で、又、甚簡単である」の部分である。これでは「訊ねることは何でもこの本に書いて」(C)あるとは考えにくく、ために「何といふ怖ろしい物憎い本であらう」(C)とも、「限りない空想の上に自分を乗せて呉れる不思議な本」(D)とも思えないであろう。

そこで、かの子が、どのようなものをもって「饅頭屋本の節用集」に擬したのかを問うことが、課題として設定されることになる。

〔さまざまな饅頭屋本〕

このような齟齬は、文学的修辭としての、いわば虚構や作為にすべての結論を求めてもよいだろう。が、そのままに齟齬にいたる経緯なり状況なりを知っておく作業も試みたい。実物との比較・対照を行なうことで虚構や作為と見なしうる領域を正確に見積もり、『落城後の女』から得られる節用集像を的確に把握したいからである。

まず上田・橋本(一九一六)によれば、そもそも「饅頭屋本」と呼ばれる節用集が少なくなかったことが注意される。

元来、饅頭屋本は、其の名が広く聞えて、而も其の書の流布するもの少い為、他本と紛へられ易く、永禄十一年本や、草書本、文亀本などが饅頭屋本と誤られた例もある(七七ページ)

こうした誤謬の背景には、節用集の創出者として奈良の饅頭屋の出である林宗二を擬する説が、他説よりも正しいものと目されていたことが与かる。

節用集写本 二卷 林宗二

節用の二字は論語学而篇より出たり。(中略)此書作者の事、或ハ東福寺の虎関といひ、あるハ舟橋環翠軒といふ説あれど、皆しからず。これは南都の饅頭屋林宗二が作也と本朝書目録に見えたり。宗二実名林逸といひて宋の林和靖が後なるよしいひ伝ふ。牡丹花肖柏より源氏物語をつたへて林逸抄五十四巻をあらはせり。又古今集の奈良伝授といふも此人の伝来也。今節用集の古本を饅頭屋本と

称す。予が蔵する所の古写本巻末に明応五年五月三日としるして花押あり。(尾崎雅嘉『群書一覽』二「和書部」二。私に句読点を付した)

なお、尾崎は、別途「節用集印刻饅頭屋本 一巻」と題して、その存在を報告するので、「饅頭屋本」と特称するのは、先に上田・橋本(一九一六)を引いた横本一巻の刊本だけであり、他の古本節用集を「饅頭屋本」とは呼ばなかったようである。

林宗二が初めて節用集を編纂したとの言説が流布すれば、すべての古本節用集が直接・間接に饅頭屋林家とかかわることになるから、そのいずれもが饅頭屋本と呼ばれてもしかたのない状況が成立してしまうのである。そして「今節用集の古本を饅頭屋本と称す」とあるように通念として定着するにいたるのである。

〔横本であること〕

饅頭屋本が横本であることは、かの子も正確に反映させたように見受けられる。が、一方では、古本節用集はすべて横本であるとする見解もあるらしい。

高木利太(一八七〇―一九三三。大阪毎日新聞社専務)は、地誌・古版本の収集家として一家をなした人である。その『家蔵日本地誌目録』に次の一節がある。

慶長板節用集 二冊 大本

饅頭屋宗二撰

慶長十六年 京都烏丸二町上ル町刊

節用集は奈良の饅頭屋林宗二の作とされ「群書一覽」には明応五年(西暦一四九六年)の花押古写本を見たとある、又一説には明応二年の著ともいふ、その初めて板行されたのが文亀二年の「饅頭屋本節用集」、次が天正十八年の「堺版節用集」、次が慶長二年の「易林本節用集」と慶長十五年の小山永次開版の同覆刻本で、これまでは何れも草行の横綴の小形本であった、本書に至り始めて字体を真草二行に改めた大本になった、この書もまた学界において古刻稀本中に数へられて居るが、詳しいことは東京帝大の「節用集研究」や図書刊行会の「古刻書史」中に書かれて居る。

慶長一六(一六一一)年刊行の節用集を「饅頭屋宗二撰」とするのは、右に触れた、古本節用集のすべてを林宗二の編著とする見解が昭和戦前期にも行なわれていたこと

を示そう。ただ、慶長一六年本以前のものを「何れも草行の横綴の小形本であつた」とするのは、さすがに受け入れがたい。高木が挙げたなかで横本なのは「饅頭屋本節用集」だけであり（ただし、文亀二年刊と特定できないが）、「易林本」も「覆刻本」も慶長一六年本と等しく「大本」（美濃判縦本）なのである。参照をうながした「東京帝大の「節用集研究」」は上田・橋本（一九一六）を指すのであろうが、そこから何も学んでいないことになろう。

このような誤謬が一介の読書人によるのならまだしも、高木のような古版本収集家の著作に見られることに驚かざるをえない。次の引用のように、高木が同好の士からも評価されていたことを知るとき、みずから公刊した目録に不精確な情報しか記されないほどに、節用集への関心が薄いものであることを知るのである。

それから一つ翁に感心したことは、単に書籍を蒐められるといふだけでなく、それに就いて、内容版式等を充分に研究調査されて、一々カードを取られたことで、これが後になって、「家蔵日本地誌目録」正統二巻となつて現れたのであるが、此の目録は現在のところでは、地誌目録として一番整つたもので、和田万吉博士の「古版地誌解題」などよりは、後から出来たわけ、収録の書籍も多く、説明も綿密である。（高梨光司一九三三）

古版本収集家でも古本節用集のすべてが横本であるとすると、あるいは、そうした認識が昭和戦前期には広く行きわたつていたことが想像される。その現れの一つとして、『落城後の女』の「横綴ぢの二冊の写本」との表現も位置付けられることになるのかもしれない。

三 かの子が参照しえたソース候補

〔かの子の博識〕

饅頭屋本節用集をはじめ林家をめぐる情報を、かの子は、どのように得たのであろうか——といった問いは、あまり生産的ではないかもしれない。純粹に情報を得るだけなら専書に就けばよいから、問題にもならないことかもしれない。ただ、ここでは、

そのような問いがあるとして、どのような回答が得られるかを示すことで、昭和戦前期における節用集観を垣間見る手だてとしたい。

とはいえ、かの子は、その博識とそれをささえる蔵書群があるため、いかなる参考文献にも出会えたのかもしれないのではある。

改めて賛否両派が一致して感嘆させられたのは、その教養と見聞の広さだった。この点について川端康成は後に「岡本さんの姿を見ていると、この人が異常な刻苦勉強家だとは、ちよつと信じにくいのであるが、自分の書庫を一度見せたいといつか私の女房に戯れ言つていたことがある。作物にうかがえる教養と博識、また遺作の驚嘆すべき質量で、今はこの人の狂的なばかりの勉強を疑う者もあるまい」と語っている。作家として登場してからの僅々二三年のみを知る世間一般が、その教養と博識を訝つたのも無理はない。五、六才のころから四十年あまりにわたつて積みあげられたものであることを知る者は、当時ほとんどいなかったからである。

その頃のある日、有楽座でかの子と出会つた武田麟太郎は開口一番、無駄げに質問した。「あなたはどうしてあんなに何でも知つてゐるんです。見かけたところは何か世の中を知らない奥様、というより無邪気で大まかなお嬢さんとか私の眼には映らないんだが」（岩崎呉夫一九六二。二七五―二七六ページ）

歌人として疾うに知られた彼女でも、小説に本格的に取り組んだのは晩年なので、その時点で多識ぶりがさらけ出されれば、意外に思う向きもあったのだろう。

仏教教学にも一定以上の知識があり、著作も複数あるので、その方面、ことに禅宗関係から林宗二をめぐる情報に接しえたことも十分に考えられる。

もちろん、先にも見たように、現在規定されている饅頭屋本とおあんの饅頭屋本との差異は、横本であることのほかは（それも偶然の一致にすぎない可能性についてはすでに述べた）、版本と写本の相違は確実であり、本文CDの書きぶりから推せば、語注の短少に対して長多の差があった。こうした差をどのように解釈するかという点で、かの子が接しえたであろう文献群を一応でも検討しておくことは無駄ではあるまい。また、そのような文献類に言及しておくことは、昭和戦前期までにおいて、節用

集がどのように社会的に受け取られていたかを観察することにもつながるので、節用集の近代史を多角的に把握するという点でも有益な作業と思われる。

〔上村観光『禅林文芸史譚』〕

一九一九年に大鏡閣から発行された本書は、「近年、建仁寺西足院から、宗二の自写本百余冊、及び林家の系図などを発見してから、之に基づいた上村観光氏及び文学博士新村出氏の研究が出て」（上田・橋本 一九一六）とする調査の成果を含むものである。特に「饅頭屋本節用集の著者林宗二の事蹟」の章によく反映されている。なお、この章名からは宗二が饅頭屋本節用集の直接の編者であると捉えているように見えるが、生年も考慮するなどして補訂者と位置づけている。

この林家は家号をこそ饅頭屋と云つたけれど、其の家は代々学者の出た方で、宗二の祖父に当る盛祐の弟温仲光公などは建仁寺の僧で、系譜に記する所に拠れば才学、著述能書ともあり。又父の道太は能書で、猿楽道にも精通し其の兄弟には策之助公、東總沙弥などと云ふ僧があつて、策之は相国寺の僧で詩や聯句に長し公家達へ出入もしたり。東總は温仲光公の弟子となつて幼より利根で、九歳の時に古文真宝を暗誦したと云ひ伝ふる位であるから、是等の人々の中で何人か著作して置いたのを、宗二が後年に増補して翻刻したものと見るのが正しからふと思ふ。（三二五〜六ページ）

「代々学者の出た方で」との表現が、新たに発見された系図に基づくものならば、当時としては最新の成果になる。おあんの父が「代々学者の出る饅頭屋だ」というのも、この上村の著作に接してのもののように思われる。したがって、かの子の、林家についての記述は、正しくも新しい見解を書き記している可能性があることになる。とはいへ、『落城後の女』に現れた節用集の捉え方については怪しげな点もあった。そこで、専書はともかく、通常の読者が手にしうる書籍には、饅頭屋本がどのように紹介されるのかを見ておきたい。そこにある饅頭屋本像を、かの子も（直接の受容経路はともかく）共有していた可能性が考えられるからである。

〔市島春城『芸苑一夕話』〕

市島（一八六〇〜一九四四）は、大隈重信に近い存在で、新聞社主筆・衆議院議

員・早稲田大学図書館長などを歴任している。『芸苑一夕話』は、学芸界に取材した随筆集で、のちに『文人墨客を語る』（一九三五）と改題・刊行されており、一定の支持を得たものようである。

その一章に「林宗二」がある。

節用集は、言ふ迄もなく、我国の通俗辞書の祖先であるが、此の節用集に、美濃半截の横本で、「饅頭屋本」といふのがある。これは、林といふ、奈良の饅頭屋の出版であるからの名だ。林宗二は、此の饅頭屋の六代目の当主道太の三男だが、昔人は、此の林家で節用集を出版したといふところから、つい持つて行き過ぎて、此の宗二が此の本の著者だとしたものだ。（中略）ある好事家が、嘗て右の塩瀬の系図や墓や過去帳などを調べた事があるが、京都の某寺にある過去帳に拠ると、確に林和靖の系統であることが知れたと云ふ。（中略）さて、宗二は、「饅頭屋本」の著者でこそは無いが、博く和漢の学に通じた人で、其の著書には、源氏物語を注釈した林逸抄や、詩文の抄物（講義録）などがある。字は桂室、林逸と称し、方生齋と号した。天正九年に、八十四歳で歿した。（上、四四八〜四四九ページ）

「好事家」とは上村観光のことだろうか。上村も饅頭屋本節用集を宗二の創始ではなく、同家に伝わったものに手を入れたとするので、市島も上村の見解を受けたものと思われる。あるいは、上田・橋本（一九一六）も同様の見解なので、そちらを参照したとも考えられるが、大学の紀要なのでどれほど一般に流通したかは知られず、参照先としては上村『禅林文芸史譚』の方が想定しやすいだろう。

このように、市島（一九二二）は最新の情報に触れている可能性があるうえに、それ以前の捉え方を「昔人は（中略）宗二がこの本の著者だとしたものだ」とするのが注意される。それが、最新の成果に触れていない、当時一般の饅頭屋本に対する理解だったわけである。前節の高木利太の認識などもここに照合されることになる。

〔大日本家庭料理研究会編『一年中朝昼晩のお惣菜と支那、西洋料理の拵へ方』〕

一方、「饅頭屋」本であるからには、料理史から節用集・林宗二に言及することもありうるのであった。

抑々饅頭が何時の時代から我国に於て製すに至つたか夫れは現在明確な記録として、北朝の歴応四年に法を求めると入唐して、正平四年北朝貞和五年に帰朝した、建仁寺の和尚龍山禪師の従弟とあつて、唐から来朝した、林和靖と云ふ学者の其後裔に林浄因と云ふ人が有り、其頃南都(奈良)に住み、氏を塩瀬と改めて、饅頭を作り始めたのであります、而して時の執権足利義政公に夫れを献上しました処、甚だ珍味なりとの讃辞を賜はり、桐の紋章を林浄因塩瀬に与へられ、日本一饅頭所の看板を許されました。

夫から此人の子孫に宗二と云ふ人が出て、此人が節用集と云ふものを筆にして饅頭屋本と云ひ世間にひろまつたものであります。(一〇四ページ)

饅頭の由来を説くかたわらでの話でもあり、もとより節用集とは縁遠い分野の本であるためか、林宗二が節用集を初めて編んだような書きぶりである(そうでない読みもありうる)。上田・橋本や上村による最新の知見に接しなかつたのであろうが、これが当時の一般的な古本節用集に対する認識であつたということでもあろう。

なお、本書が、昭和戦前期の刊行であることを考えれば、料理と女性との関係は密であろう。料理本という経路によって女性たちにも節用集の話題が共有されていった可能性を示す興味深い例ともなっている。

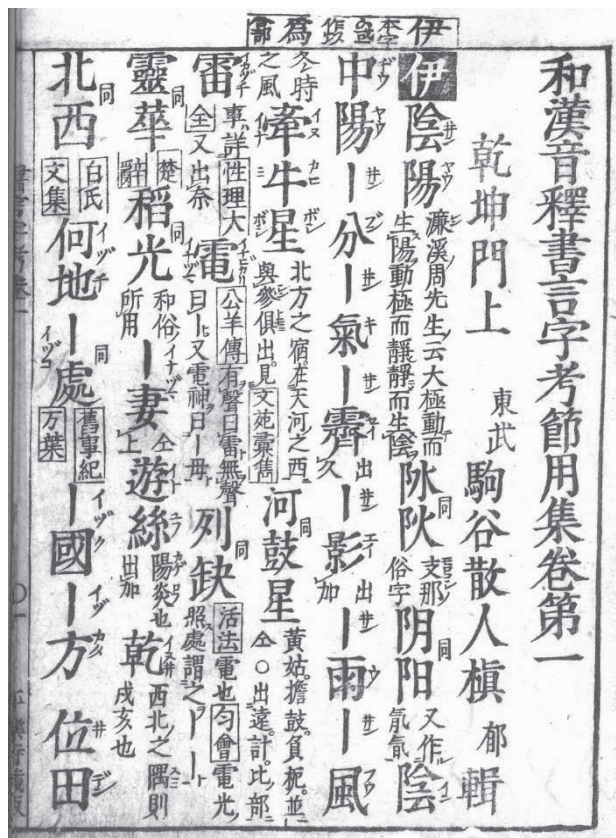
四 おあんの節用集のモデル

〔『和漢音釈書言字考節用集』〕

「訊ねることは何でもこの本に書いて」あり、「限らない空想の上に自分を乗せて呉れる不思議な本」であり、「怖ろしい物憎い本」とまで思わせる節用集は実在するのか——この問いもまた、かの子が直接に参照した節用集を特定しようというのではなく、どのような節用集があつたかを参考までに心得ておくべく問うものである。

一七世紀の節用集は、基本的に古本節用集乾本の影響を色濃くとどめている。書体表示を行草書・楷書の二体併記(真草二行)に改めるが、語注はまばらであつて、その内容も詳細なものは少ない。寛文・延宝(一六六一〜一六八一)期は、語数の多い

和漢音釋書言字考節用集卷第一



『和漢音釈書言字考節用集』 架蔵

ものが刊行されるが、やはり、充実した注が付されることは少なく、『落城後の女』本文Dのような、さまざまな知識に接しうるような内容ではない。

ただ、槇島昭武編『和漢音釈書言字考節用集』(享保二(一七一七)年刊ほか。以下『書言字考』)では一変する。漢文ながらも詳注が備わるのである。図版七行目の「稲光」は、日本人には親しみやすい用字だが、「和俗ノ所用」とあるのを見れば、『書言字考』のスタンスが、漢文注と相俟つて、日本語と正格な漢文との橋渡しであることが察せられる。そのことは、書名の「和漢音釈」にも表れていよう。

五行めの「牽牛星」には詳注が備わるが、異表記の「河鼓星」では「黃姑・担鼓・負柎」とさらなる異表記が示されており、注内容の分担がなされている。さらにヲケヒ各部に関連項目のあることが示されるが、それぞれの該当箇所には次のようにある。

- ヲ部 牽牛星(出伊。比)
- ケ部 牽牛星(出伊。遠。比)

ヒ部 牽牛星〔出〕伊。遠。計一〕

イ部のイヌカヒボシ(牽牛星・河鼓星)から見れば、異音同義語の存在を示すわけだが、漢字列「牽牛星」がフケヒ各部内で同義語をさがす手がかりになっている。同じことは「フタナバタ・ケンギウセイ・ヒコボシ」からも相互に言いうる。一語を引くことで他の語に行きつく仕組みなのである。

また、イヌカヒボシでは「牽牛星・河鼓星」の二つの表記のほか、詳注と異表記が示されるが、他のフケヒ部の三語にはこうした丁寧な扱いはしないので、イヌカヒボシを他の語形よりも重視していることが窺われる。逆に、イヌカヒボシ以外の三語から引いた場合、参照注をたよりにイヌカヒボシの詳注に行き当たるのだから、迂遠ながらも、表示スペースの圧縮も兼ねた、周回な仕組みでもあるのである。

この『書言字考』における、異音同義語からも詳注にたどりつける組織的な参照注の存在は、『落城後の女』の「おあんがおよそ訊ねることは何でもこの本に書いてあつて」(C)とのありようを連想させないでもない。また、『書言字考』は幕末まで幾度か再版されており、現代でもしばしば古書店頭やネットオークションに現われるように、比較的目にしやすいものである。明治から昭和を生きたかの子が接しているも不思議ではないものである。そしてまた、より周到に、かつ表記だけでなく事物の説明の充実まで求めるとなれば、近世の節用集のなかに他に該書は存しない。

〔『伝家宝典』明治節用大全〕

もう一つの候補があるとすれば、博文館の『明治節用大全』(明治二七―一八九四)年刊)がそれである。書名に「節用」の文字を含むが、本書では、語形(仮名書き)から漢字を求める辞書部分は存しない。近世節用集において付録であったはずの日用教養記事が、肥大というだけでは収まらない、他にない充実をもって編み上げられたものである。巻頭の「例言」からは『江戸大節用海内蔵』(文久四―一八六四)年刊)が強く意識されていたことが知られるが、たしかに同書も、付録記事を充実させたものではあった。もちろん、近世節用集の一つとして辞書部分をその本体とするものだが、乾坤二巻の乾巻を付録記事に当てるほど充実させたものではなかった。

『明治節用大全』の概要について、内容と編集方針を端的に伝えてくれる広告文か

内外格宮集

作詩訣

家事經濟編 衣服門 裁縫類

四〇四

者ど與に任せず (コレレ) 自由の爲めに強を披はは勇者にどつて眞正の名義なり (ガルガカス) 自由あらんは決して安楽秩序あるへからず (ミルトン) 自由の法律の許す所のものを爲すの方より成る (シロセ) 柔順なる奴隷も亦た後警を爲すの時あらん (ギッボン) 腕力は決して權利を保護するに能はず (ベニエー) 逆徒は之を敵視せざる可らず 予は時に叛逆を好む然れども逆徒を誑誘せず (アルターク) 逆徒の第一若手として自己を亡ぼす (デモスゼキス) 逆徒は自己を擁護する人々にすら恐るる (タシタス) 不得止と云ふは已に罪罰者の辭柄なり (ミルトン) 人衆を統御するの大道は公平に自ら勞苦を分ち取るにあり (アゼール)

一家の治法は即ち一國の治法 其正邪相攻二致なし各家の私論の則ち國の公論其曲直高下二端なし (スマイルズ) 極度の盛時遇ひ一事の苦楚すべしなることは是れ人生の得也 例多ければ必ず (押韻互換法) 是れは一詩の中に韻字を踏み換へることにて前段を反對して大抵七言古風に用ゆる法なり五言にして韻を踏みかへると云ふことは古人には絶て之れ無きことなれば七言ハ却て踏み替へるを正式とす前章に説きし如く七言にて一韻到底なるの大要白樂天の詩にあるのみ其餘唐宋の大家には絶て見ざるなりと云ふ程なり故て此押韻の互換の韻秘説あり我國にては往年まで此法を看せし大家之れなく其之を聞きたるは頼山陽梁川星巖の方に依り其韻登々所主人古詩韻範を著しは是れ古詩の韻法初て其真を得たり然るも今

三ッ身 三ッ身 三ッ身

片面積類三ッ身

一身單衣裁方は先づ袖を表より長一杯に縫ひ裏より縫ひ返し次に脇代を縫ひ身の前へ折返し次に衿を附け襟下を縫ひ次に裾下りを下げて裾に衿を附け衿巾を縫ひ次に袖附を縫ひ袖の方返し身の八ツ口を明け終りに裾を着くべし

『伝家宝典』明治節用大全』国立国会図書館蔵

ら見ておこう。最初の一文からも知られるが、豊富な内容になっており、おあんの節用集のモデルであつてもおかしくはない。

節用の書、古来出版せられたる者数十種、皆な能く日常必需の事項を網羅し、之を坐右に備ふれば、事として弁せざるなく、機に臨み変に応じて、望む俤に用を達すること囊の物を探ぐるが如し、然れども明治の聖世と為り、泰西の新事物をして採用すること日に多く、人間生活の必要事項は尽とく面目を改む、而して其明治新天地の森羅万象を網羅し、日常坐右の宝典と為すべき大節用集は未だ出でず、是れ昭代の大欠典なり、弊館久しく之を憾み、当代知名の諸大家に囑して材料を収集すること此に数年、漸やく編次して此の書を為す、皇室古今御歴代の系統、武家の系図、和漢洋古今有名人物の伝記を始とし、衣服の裁縫、飲食の料理、各種の製造法、家屋の構造、室内の裝飾、庭苑の排置等は勿論、男女礼式、

家政整理、女子手芸の方法、香花、茶湯、音曲等の諸芸、農、工、商業、水産、養蚕、製茶等生産業の方法、男女日用公私用文例若くは歴史、地理、文学、理学、事物起元、神社仏閣、名所旧蹟の由来、詩、歌、連俳、文章の作法、和漢洋宗教の由来、開基者の伝記等総べて人間の処世上知るを要する事は、一として備はらざるなく、真に古今来唯一の大節用集、全編大版一千四百頁の中に集めて漏らさず、江湖諸彦、請ふ幸に愛読を賜へ、(ダニエル・デフアー作・高橋雄峰(一八九四)訳『(ロビンソンクルソー)絶島漂流記』上巻(博文館)所掲)

実際に刊行された『明治節用大全』本文は一二〇〇ページにとどまった。紙面を上下三段に分かつてそれぞれに教養記事を展開するのは、近世節用集ならば三階版と呼ばれるレイアウトであり、下段が辞書本体であった。本書でも、下段を「本欄」と称し、上段・中段は「〔鼈頭〕上欄」・「〔鼈頭〕中欄」と称して付随的に扱っている。

右の広告では、相応に整理・抽象して述べられているため、本書の内容を把握するには適するのだが、実際には、後発の百科事典の構成などを念頭におくと、かなり違和感のあるものであり、記事名も異様ではある。「総目次」より主要記事名(丸囲み黒丸表示分)を示せば次のよう。

本欄目次

皇室一覽・皇族一覽・皇統略図・武家系図・古今名人列伝・各官幣社所在地及祭由緒・仏教各宗本山の由緒附著名寺院・家事経済編・日本礼式・家政整理法・民間治療手当法・看病心得・果樹栽培法・果樹繁殖法・花園法・農家心得草・蔬菜栽培法・播種年中行事・肥料分析表・農産物分析表・養蚕法・実験製茶法・水産繁殖製造法・古今遊芸指南・日用書簡文例・郵便及電信規定要覽

〔鼈頭〕中欄目次

和漢洋年代略記・小倉百人一首略解・俳諧名士談・俳諧名士談統編・作詩訣・万国宗教大意・和歌のしるべ・作文の栞・(公用文契約)文例・要文摘語・諸物体比重及重量・力の工程一覽・験圧器及晴雨計一覽・験温器及寒暖計一覽・農業用工夫工程一覽・日用法令集・諸税及手数料一覽・内外郵便心得

〔鼈頭〕上欄目次

日本形勢要覽・万国形勢要覽・東京歳時記・華族一覽・天象略解・地文略解・陽曆祭式日略解・工商年代記・學術沿革小史・技芸沿革小史・内外格言集・内外事物原始・遊戯の由来・支那学者列伝・男女行儀作法・諸学科要略・近世三十六家伝・本朝大地震年表・初学者必読書類

各記事名のもとにはさらに細分された題目が掲げられ、記事が展開していくことになるが、ある記事は事典的な体裁であり、他の記事では解説書的な構成を採り、あるいは便覧的なデータ提示に終始するものがあるなど、統率のとれた書きぶりではない。それは、各記事名から推しても、日常生活に益する内容をもつ重宝記類の類聚として構想されたことを意味するのであろう。また、こうした教養全書風のもものを「大節用集」と呼ぶこと自体、明治半ばでの節用集観の一端が現れてもいよう。

このような構成ではあるが、明治中ごろの教養豊かに生活を送りたい人には相応の満足感を与えたのであろう。一定の支持を得たようである。

明治になつてから、ややその体裁をなしたものは、博文館が発行した「伝家宝 典明治節用大全」(明治三十年代?)であろうか。菊判千二、三百ページ、定価一円六十銭であるから、当時としては大冊ものの一つで、これが大いに売れたので、同館は引きつづき「新撰日本節用」「明治少年節用」などを出版した。「節用」という言葉がその頃から流行して、だいたい方々でも用いられた。(小川菊松 一九五三)

実際、版も重ねている。最新の版数は確認しにくいものだが、明治三六年刊行の訂正九版が種々の図書館に蔵されている。

おわりに

「横綴ちの二冊の写本」の「写本」については直接触れてこなかった。どのような事情で、かの子が「写本」としたのか確定できる材料もないが、第二節などで見たように、古本節用集の写本が広く饅頭屋本と称されていたことを踏まえたものであろうか。あるいは、古い書籍は等しく写本であるとの素朴な先人観によるとも考えられる

が、ならば、読者一般にも共有されていた了解事項でもあろうから、わざわざ「写本」とするのは不審でもある。が、あえて「写本」と断わることで、当時いまだ見られた木版・銅版・活字版の節用集——近世の早引節用集の未流で、付録も少なく、語釈もないような、よく言えば用字集に徹したもの——とは異なることを強調する意図があったのかもしれない。いや、そうであったと考えた方が分かりやすい。

かの子は、「饅頭屋本」に接した、おあんの昂揚を巧みに描いて見せた。ことに編者とした饅頭屋宗二を「あらゆる智慧の持主といふ文殊菩薩と人の心を自在に誑かす天魔外道とを一緒にしたやうな神秘的な名前」(D)とまで表現する以上、近代にありふれていた版本の節用集を微塵にも読者に想起させてはならなかったはずである。その意味で『落城後の女』の「饅頭屋本」は「写本」でなければならなかったのである。そう考えるとき、金水敏(二〇〇三)の「役割語」との概念が、節用集のような文物、あるいは写本か版本かといった書籍としての状態についても適用できるもののように思われてくる。物語りの送り手と受け手とのあいだで共有できる表現の効果的な利用ということである。そうした表現手法の下に「写本」との表現を位置づけた方が、少なくとも筆者の作意をスムーズに受けとりうるように思われる。

このことは反面において、小説上の修辭と事実との相違を細かく述べ立てても生産的ではないことを意味するケースもありそうだが、本稿の場合、その相違を見つめ、その形成される経緯を追究することなくして、節用集像の実体や節用集観の実態を捉えることはできないものと考ええる。この種の研究においては、手法を多く取り揃えて、当面の課題ごとに的確に対処するほかないものと理解している。

参考文献

- 市島春城(一九二二)『芸苑一夕話』早稲田大学出版部。改題本に『文人墨客を語る』(翰墨同好会南有書院、一九三三)
- 岩崎呉夫(一九六二)『芸術餓鬼 岡本かの子伝』七曜社(一九六三年版による)
- 上田万年・橋本進吉(一九一六)『古本節用集の研究』東京帝国大学文学部紀要二(勉誠社復刻一九六八)

上村観光(一九一九)『禅林文芸史譚』大鏡閣

白井荆道編(一九四〇)『大本山建仁寺略縁起』建仁寺

小川菊松(一九五三)『出版興亡五十年』誠文堂新光社。清田啓子(一九八〇)によ

れば、実際の著者は中山泰昌(編集者。一八八四〜一九五八)。

金水 敏(二〇〇三)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店

佐藤貴裕(二〇二一)「節用集終焉期の諸相——大正期点描——」『近代語研究』二

二

佐藤貴裕(二〇二二a)「節用集終焉期の諸相——明治期点描——」『岐阜大学教育

学部研究報告 人文科学』七〇—二

佐藤貴裕(二〇二二b)「平成期における節用集認識——隣接分野を中心に——」

『国語語彙史の研究』四一

佐藤貴裕(二〇二二c)「節用集終焉期の諸相——昭和期点描——」『近代語研究』

二二

佐藤貴裕(二〇二二d)「昭和期刊行実用辞典年表稿」『岐阜大学教育学部研究報告

人文科学』七〇—二

清田啓子(一九八〇)「資料紹介 花袋『縁』中の一モデルの証言」『駒沢短大国文』

一〇

大日本家庭料理研究会編(一九二八)『一年中朝昼晩のお惣菜と支那、西洋料理の拵

へ方』中央書院。改題本に『手軽に美味しく出来る家庭向き支那料理と西洋

料理』(香蘭社、一九三七)。

高木利太編(一九二七)『家蔵日本地誌目録』

高梨光司(一九三三)『読書の興味』

本稿は、日本学術振興会・科学研究費基金・基盤研究(C)二〇K〇〇六二七による研究成果の一部である。